

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2013年6月

67号



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com

第2回「サッカー教室」は3月22日（土）から30日（土）まで8日間開催し、生徒と子どもたち、学校、地域から大歓迎を受けました。ボールやビブスなどの用具用品やカンパの支援を寄せてくださった大勢の方々に、厚くお礼を申し上げます。

教室を開いたのはプレイヴェン、スヴァイリエン両州の高校、中学、小学校・幼稚園それぞれ4校と養護施設1カ所の計15カ所、指導を受けた児童、生徒は1,100人、参加した校長先生や教職委員が50人、地域の住民も含めて見学者は1,200人でした（いずれも概数）。

サッカー指導にあたったのは第1回に続いて日本サッカー協会A級指導員の小林俊文さん（群馬県立渋川青翠高校教諭）と今回ボランティア参加してくれた小林茂さん（千葉・八街アカデミックススポーツクラブ代表）。KEAF-Japan事務局から岡宮喜雄さんと内田義博さんがコーディネーターとして加わりました。

成田出発から帰国まで11日間のきついプログラムでした。皆さん、ありがとうございました。

プレゼントした支援品は、サッカーボール93個、移動式簡便ネット5セット、ビブス（サッカー用シャツ）64着、短パン30着、空気入れと予備針10個、ホイッスル5個でした。サッカーボール45個、ネット2セット、ビブス36着、空気入れ1個は次回以降に回すことにして、いつも現地活動のガイド・通訳を努めてくれるO・ソワンさんの自宅に保管してもらい

ました。

小林先生の教え子たち、青翠高校生徒会が集めてくれたノート、ボールペン、鉛筆などたくさんの文房具は6月の現地訪問の際に各学校に届けます。



写真：簡便ネットの前で、ビブスにすっぽりと入り、大きなボールを抱えたアンサー小学校幼稚園クラスの子どもたち。中央は小林コーチ、両側は先生。

子どもたちの笑顔は何物にも代えがたい「世界の宝」

サッカーを通じてスポーツをする喜びを感じさせることができれば、どんなに素晴らしいことか。

数10名の女子生徒が途中で帰ってしまったり、幼稚園の子ども1人を泣かせてしまったり、と指導力のなさを実感しています。でもプログラムに参加された皆さんの「センス・オブ・ワンダー」（何にでも感動する心）の大きな力に助けられました。今回の「サッカー教室」も大成功だったと言っているのではないかと思います。

子どもたちの笑顔とキャー、キャーと楽しむ声が、私たちに大きな力を与えてくれました。この「楽しむ心」をいつまでも忘れさせないように、大人たちがその場をつくってやる。KEAFの活動はそのために大事な役割を果たしていると思います。子どもたちの笑顔は何物にも代えがたい「世界の宝」です。

小林俊文先生「カンボジア通信」に寄せてくれた「所感」

尻込みしていた女生徒が ゾウリ脱ぎ捨て裸足でプレー

内田 義博（事務局）

啓蟄の候を過ぎた東京とはいえ、まだまだ肌寒い。大量のサッカー用品を背負い、3月22日（金）、成田発9時30分、VN30便でホーチミン経由プノンペンに到着した。気温は35度を超えている。出迎えのワゴンに荷物を載せ、ホテルに向かう。軽い夕食を屋台で済ませた。岡宮氏の部屋で持ち込んだサッカー用品、その他すべての品を訪問する学校別に、種類別に、仕分けの作業を夜中までかけて行った。この作業が意外に厳しかった。

そうだ！この地の訪問ははじめてである。ホテルの外は行き交う車、オートバイ、バイクタクシー、自転車、沢山の人々、そしてけたたましい騒音。街は活気にあふれている。錯綜した道路事情で事故の様子も見当たらない。私は環境の変化について行けなかった。明日からのサッカー教室が早くも思いやられる。

ホテルからの出発時間はそれぞれ違ったが、概ね8時だ。早い時は6時。先方では生徒が既に待っている。土曜日と日曜日の訪問では10数名だったが、時間が経過するにつれて増えていくのが良くわかった。ウィークデー訪問校は、120名を超える生徒および職員さん、さらには他の人々まで出迎えてくれた。ワゴン車が到着するや、沢山の子どもたちが集まってきた。準備を積極的に手伝う子どももいた。目を離すと膨らませたボールで勝手に遊び出す光景もあった。

目の不自由な子、みんなで支えて

ある幼少校での出来事だ！目の不自由な男の子を校長先生が手を引き私たちのワゴン車にその子の手を触れさせている。車とは？大きさは？体感させているのだろう。その子はズダ袋なるものを引きずっていた。おそらく自分の安心領域の確保のツールとして使用しているのだろう！校長先生がその子から離れると即仲間の子どもが手を引いて、私たちがボールに空気を入れたりしているとところにやってきた。膨らませたボールを渡した。

大声を上げて喜びゆっくり手でさわると、思い切り高く放り投げたのである。ボールの風を切る音、落下するだろう地点、その時の空気、さらに周囲のざわめき音も、察知すべく、砥ぎ澄まされた彼の五感に私は羨望の念を感じた。

別の幼女は小林先生のゲームの説明に懸命に聞き入るも、言葉の壁もあり理解できずにパニックになり泣き出してしまった。純真な涙そのものだ。

試合前の準備体操のため全員集合をかける。幼少組、低学年、高学年とそれぞれの行動の温度差に感じた。幼少組は、こちらから手を引いて集める子もいたが、どんどん集まってきた。低学年はスローモーだが、素直に随時応じてくれる。高学年は声をかけるとテレ隠しのためか、特に女生徒は共通して尻込みしてしまう。しかしゲームが始まると、草履を脱ぎ捨てて、裸足でプレーするではないか。

自チームに得点が入った瞬間、審判を務めている私と全プレイヤーとがハイタッチのパフォーマンスをする。集合時の謙虚さと違い、幼少、小学生と同様喜びに満ち、大声でしかも力の入ったタッチ。私がずっとこけるほど否応なしでゲームを盛り上げてくれた。集合のときのあのネガティブさとこの喜び方の温度差は一瞬にして解消し、皆一緒に楽しいサッカーになった。

終了後ソワン氏（現地の通訳）の楽しかったですかとの呼びかけに、楽しかったです、でも疲れました—と返事が返ってきた。



写真：精一杯サッカーを楽しんだ幼少組女生徒と内田さん。後ろは先生。プレイトープ小学校で。

グラウンドは家畜と共有

サッカー部員だけの教室も開かれた。技術的なパスの仕方など私にとっても大変いい勉強になった。グラウンドの広さは様々で20面も可能な学校もあった。牛が闊歩し、ブタ、イヌ、ニワトリ等も共有している。それぞれの糞が乾燥した土に混じり、選手が走るたびに舞い上がる。しかも35度を超える気温。ただいくつかの太木があり木陰がうれしい。

凸凹が多く、ゴミ、缶のヘタ、トゲのある木ぼっくりと、危険な所もあった。裸足だから実は大変心配だったが、誰一人怪我もなく遊ぶことができた。

「楽しむ」から始まるスポーツ

グラスルーツ支援に共感

小林 茂

(ボランティア参加)

スクール参加に向けて

今回、私がキープジャパンの活動に参加いたしましたのはサッカースクールリーダーを務めた小林俊文氏（日本サッカー協会A級指導者・渋川青翠高校教諭）からの物資支援要請の案内メールがきっかけでした。メールではカンボジアの現状と子供たちへの支援の内容が綴られており、グラスルーツに焦点を当てた事業内容に共感し、自身の指導者としての経験・勉強のために参加を志願させていただきました。

実施感想

カンボジア郊外にてスクールを実施し、園児から高校生、サッカー未経験者からサッカー部員まで様々な年代の指導をさせていただき、小林先生の元で幅広い経験をすることが出来ました。小林先生と相談しながらサッカー未経験者には「楽しむ」ことをテーマとしサッカー部の選手には試合に活かせるリアリティを含むトレーニングを実施し私自身担当した小学生のスクールではクメール語の単語を覚え現地の言葉でコミュニケーションをとることにチャレンジしました。

サッカー部の選手以外はほとんどの子供たちがサッカー未経験者であり、体育の授業のないカンボジアでは集団で身体を動かす習慣がなく、ちょっとしたボール遊び（アイスブレイク）でも子供たちは歓声をあげ夢中に取り組んでいました。

スポーツは元々、競技として出来たのではなく、遊びが発達し競技へと出来上がったものでもあります。ですから根源である遊び（楽しむ）ということテーマとしカンボジアの子供たちに身体を動かす楽しさを伝えるために小林先生のご指導の元、参加した全員でハイタッチなどを取り入れ子供たちのテンションを上げるなど参加指導者で要点を共有できたことも成果につながった要因だと考えられます。

スクールを単に実施し終えるのではなく、移動の車中や食事をしながら参加者で反省点やスクールの内容を話し合い次のスクールにつなげていけたことでスクールを重ねるごとに良いものを築き上げられたことは大変に良かった点だと思います。

今回のスクールでは、ほとんどの子供がもれることなく参加でき楽しむことができサッカー指導者

以外のキープジャパンスタッフ・現地ガイドの積極的な協力がなくてはこのような大きな成果は得られなかったと思います。

このグラスルーツに焦点を当てた素晴らしい活動を継続・発展させていくためにも反省点改善点を見出していくことが今後大切ではないでしょうか。



写真：実戦訓練。コンポントラウバイ高校で。

今後の課題

私自身今回のスクールで感じたことは1回のスクール実施で出来ること出来ないことがあるということです。

1回のスクールで子供たちを楽しませることは出来ますが、モラルや道徳心を養うことは出来ません。例えば今回まわった学校の敷地にはゴミが多く、子供たちは平気でゴミを捨てる習慣があります。この点などは1回のスクールで改善することは難しいですし国民性や国の教育もあるかもしれません。ただ日本人の感覚では考えられず精神を養うスポーツという点ではカンボジアの子供たちにも伝えていかなければならない点だと。

そのためには今回のように子供を対象としたスクールだけで伝えるのは難しく、カンボジアの教諭や指導者などを対象とした講習会（スポーツ指導法）の中で伝えていくことも重要になってくると思います。子供たちにゴミを捨てることが良くない事という認識はなくそのような教育も受けていないのではないのでしょうか。それはカンボジアの大人でも同じく日本人との認識の違いだと思います。教育・モラルも伝えていき訪問するたびに学校の敷地が綺麗になり改善されていくこともキープジャパンの事業として大きな成果につながると思います。

また今回のスクールで才能ある子供をたくさん見ましたが、郊外に生まれた（次の4頁に続く）

(3頁から) ということで才能を伸ばことの出来ない子供もたくさんいると思います。私はサッカー指導者でもありますのでカンボジアサッカー関係機関と連携がとれれば選手の発掘・育成・強化に貢献していけるのではないかと考えております。

まとめ

キープジャパンの事業に参加させていただき素晴らしい活動を肌で感じました。この事業を発展させていくためにも指導者の確保とスクールの反省・見直し・改善が最も大切になると思います。3年後5年後10年後といった長期プランの作成や年度ごとの成果目標の設定も重要だと思います。今回のサッカースクールを定着・発展させていくお考えがありましたら微力ながら今後もお手伝いさせていただければと考えております。今回、私を受け入れてくださいましたすべての方と勉強させていただいたカンボジアの子供たちに感謝し報告とさせていただきます。(千葉・八街アカデミックスポーツクラブ代表)

《ご支援、ありがとうございました》

今回の「サッカー教室」計画について大勢の方から支援品・カンパをたくさん頂戴しました。以下は支援をしてくれた団体や個人のリストです。お陰様で現地の子どもや生徒、学校や地域に歓迎される教室を実施することができました。心よりの感謝を申し上げます(敬称は略させて頂きました)。

サッカーボール5個 キックオフ・高島 ▽カンパ Will 加藤 ▽カンパ 斎藤銑也▽カンパ 港信一郎▽サッカーボール42個、ビブス12着、ドクターバッグ1 岩田武彦・千葉高体連 ▽バレーボール6個、学用品1袋、ポンプ大1、ビブス29着、帽子32、シーシート3 千葉実籾高校▽学用品1袋 ▽サッカーボール30個、ビブス34着 東京理科大学・矢崎矢 新宿区神楽坂▽サッカーボール26個 秋田・岡山県真庭市多田▽サッカーボール14個 日立工業高校・成富雅人▽バレーボール31個、卓球ボール4袋 伊勢崎工業高校 ▽カンパ、子供靴1箱 村上亮造/聡基・高崎市中里町 ▽サッカーボール2個、ユニフォーム2着、短パン1、なわとび縄4、学用品1箱 中村靖子・伊勢崎市市場町 ▽ピクアップゴール(大)7セット 伊東サッカー部OB会▽文房具1箱 伊丹小学校・兵庫県南川佐郡 ▽サッカーボール15個 旧東海道品川周辺町づくり協議会・竹中茂▽文房具1箱 小林・沼田西中学。



写真：プレアンドゥン高女子サッカー部員と小林茂氏。

小林さんが提起された「課題」

「サッカー教室」に飛び入りでボランティア参加してくれた小林茂さんから、このプログラムを評価していただくとともに今後への「課題」も頂戴しました。ありがとうございます。

KEAFのモットーは「1人でも多くの子どもたちに教育の機会を」です。小林さんのいうルーツへの奨学金や学用品などの支援に加えて、日本の子どもたちには当たり前の「遊び」にも機会を与えたいと、折り紙、綾とり、星の観測などの教室を開いてきました。サッカー教室もそのひとつですが、いずれも年に1回開けばいいというのが現状です。それでも子供たちの小さな世界がちょっとでも広がるきっかけになればいいなと思っています。

サッカー教室では遊びながらも基礎が大事と、小林先生にコーチをお願いしています。小林先生はよく、いい素質の子がいると言われます。将来サッカー選手が生まれたらいいなと思っています。

サッカー教室を企画するにあたってJリーグに教えを請いにいったところ、Jリーグは東南アジア諸国にサッカーを普及させるプログラムを進めていると聞きました。最近、遅れていたカンボジアのサッカー団体との提携が決まったそうです。KEAFのサッカー教室がその底辺になれば幸いです。

カンボジアの学校(だけではありませんが)のゴミは日本人なら誰でも眉をひそめると思います。この種の「モラル」の問題には経済発展や文化の背景があります。いろんな経験から直線的に「教える」ことはしないようにしてきました。最近、自ら生徒に学校をきれいにさせる運動を始めた学校が現れました。これを広げたいと思っています。(金子記)

教員養成所学生にも奨学金

高校奨学金も8人増、6月訪問で選考

6月の現地訪問で9月1日からの新年度の奨学生を選考します。奨学生の対象は教員養成所で学ぶ学生にも広がります（会報前号でお知らせ）。

カンボジアでは校舎だけでなく先生の数も絶対的に不足しています。小学校から高校まで、全国の学校で先生を大急ぎで増やしたいのです。しかし高校の教員になるには大学4年のあとさらに2年間教員コースを卒業することが求められていて、時間がかかります。このコースに進める生徒の数もまだ限られています。

そこで高校を卒業して2年間、教員養成所の小学校コースまたは中学校コースで学んでまず教育現場に入り、経験を積んだうえでキャリア・アップを図るという実践的な教員育成策がとられています。KEAF 支援の4つの高校から大学には行けずに教員養成所に進む生徒が年々増えています。



写真：プロモルプロム高校の奨学生たち。

タッコー、コンポントウラバイ両高校の新卒業生からそれぞれ2人、計4人の奨学生を選びます。支給金額は年間100ドルです。プロモルプロム高校では毎年大学進学生の中の2人に奨学金を出しているので教員養成所学生奨学金の対象にはしません。

教員養成所が置かれている州都プレイヴェンのプレアンドゥン高校も学校側の意向で対象外にし、その資金を新たに5人の高校奨学生に回すことにしました。タッコー高校の奨学生は2人でしたが、新年度から5人に増やします。いずれも6月訪問で面接して決めます。高校生奨学金は年間50ドルです。

これで2014年度の高校奨学生は113人、これに教員養成所学生4人、大学生8人を加えて奨学生総数は125人になります。

6月訪問の日程は15日（日）出発、24日（月）帰国、この間の16日（月）から23日（日）に高校4、中学4校で奨学生面接、プノンペンで大学奨学生と面談して大学生生活の話を聞くほか、支援各学校をできるだけ多くまわって先生や生徒たちと交流します。



写真：コンポントウラバイ高校の奨学生と副校長先生。

気になる円安の行方

今年度（2012・9～13・8）の奨学金は昨年10月と今年2月の2回に分けて支給しました。この間に円価は20%余りも下落しました。2月支給総額金はその分、支出増になりました。来年度の奨学金を支払う秋の時点で円がいくらになっているのか、気になります。

農村でもドルがそのまま流通

カンボジアの通貨リエルは今年初めで1ドル3,996リエルです。この20年ほど、ほぼ1ドル4,000リエルに事実上、固定されています。そのなかで日常生活にドルがそのまま流通するようになりました。5～6年前にはドルが広く流通しているのは首都プノンペンやアンコールワットのある国際観光都市シエムレアプだけでした。最近ではKEAFが支援している貧しい農村でも普通に流通するようになっていきます。

これに合わせてKEAFも数年前から奨学金をドル払いにしました。プノンペンでドルを大量のリエルに換金する手間が省けるからです。それでも100人ほどの月5ドルの奨学金を1ドル紙幣にして1人ずつ封筒に入れて支給するのは結構な作業になります。

カンボジアは先進諸国企業の新しい工場進出先および投資先になって、インフレも急速に進行し始めています（前号参照）。ドルを持っていた方が得ということで、ドルの流通がさらに進むのでしょうか。二重通貨の元の庶民生活はどうなるのか、よく分かりません。

メトロポリタン美術館が2体返還へ

カンボジア歴史遺産が国外流出 米で6体発見、内戦の混乱で盗掘、盗難

アンコール王朝時代の遺跡から盗掘されたり盗まれたりしたとみられる貴重な歴史遺産の石像6体が、米国各地の権威ある博物館や美術館などの手に渡っていることが分かり、カンボジア政府が返還を求めている。一部は返還に応じる方向だが、裁判になっているものもある。

アンコール王朝を通して首都はアンコール遺跡群で知られるシエムレアプ地域におかれたが、王族内の権力争いから928～944年の期間だけ北東100キロのコーケルに首都が移された。石像はこの時期に建造された40ほどの寺院のなかのひとつ、プラサト・チェンにあったものとされている。いずれもヒンズー教の叙事詩ラーマヤナやマハーバータラに登場する神や人物をかたどった美術的価値も高い石像。

ニューヨーク・メトロポリタン美術館はこのうちペアの「膝まずく戦士」の石像を、東南アジア・ギャラリーの入り口に20年来陳列してきた。同美術館はこの2体が盗掘・盗品であることが分かったとしてカンボジアに返還することを決めた。ほかの3体はノートン・シモンズ博物館（カリフォルニア州パサデナ）のレスラー像、クリーブランド美術館のラマ神像、デンバー美術館の首のない猿神像で、これらはまだ返還に応じるか決着がついていない。最後の1体はニューヨークの著名なオークション業者ソトビーズが所有するアスリート像。ソトビーズは2011年にこのアスリート像をオークションにかけたが、カンボジア政府の抗議で取り下げた。同社は返還を拒否して裁判になっている。

国連（ユネスコ）は1970年、歴史遺産である考古学資産や美術品の闇取引を禁止する議定書を採択した。カンボジア戦争が始まったころだ。ソトビーズのアスリート像以外の5体は、この協定成立の後の1980～90年代に入手したとしている。

カンボジアではその1970年に中立政策をとる元首シアヌーク殿下がクーデターで追放された。背後に米中央情報局（CIA）がいたとされ、軍部右派の新政権は米国のベトナム戦争に協力、左派クメール・ルージュとの内戦が始まって90年代後半まで悲劇的な混乱の時代が続いた。この間にプラサト・チェンばかりでなく、国内の多くの遺跡から歴史遺産が美術品として闇ルートを通して欧米に流失したとされている。

米国内では6体のほかにも数10体の石像などが美術館や収集家に高額で買い取られたとみられている。メトロポリタン美術館やほかの美術館は、いずれも違法な売買とは思わなかったと説明している。



写真：アンコールトムのアプサラ（天女）像

盗掘・販売一帯の国際ネットワーク

カンボジアに限らず、イタリア、ギリシャ、エジプト、トルコなどで歴史的な文化遺産が盗掘されたり、盗まれたりして国外に持ち出され、高値で売りさばかれてきた。1970年ユネスコ議定書によって国際的な取り締まり体制が強化された。だが「闇のビジネス」を取り仕切る国際ネットワークの根絶は容易ではない。米連邦捜査局（FBI）はこのマーケットで動く金は米国だけで年間60億ドルに上るとみているという。

少し古いが英ガーディアン紙の2002年の特集報道によると、闇のネットワークの中継点となってきたのがジュネーブ。ここに持ち込まれた盗品は5年経過すると、その出所や持ち込みの経緯などはあいまいなまま「商品」のお墨付きが与えられ、その多くはロンドン、ニューヨーク、パリなどに「出荷」が可能になる。いわゆるロンダリングである。メトロポリタン美術館、大英博物館、ルーブルなどの権威ある博物館や美術館もこれを購入する。金額は数千万ドルから数億ドル（数億円～数10億円）に及ぶものも少なくない。

最近の国際的なナショナリズムの高まりで、イタリア、トルコなど流出元の国が1970年以前にさかのぼるものも含めて返還要求を強めていて、訴訟にも訴えている。

現地活動支えてくれる

親日ファミリーを紹介します

長女は香ちゃん、長男は金太郎君

KEAF がカンボジア現地の支援学校を訪問するとき、いつもガイドや通訳の役割を担ってくれるのは、オウン・ソワンさんとそのファミリーです。ソワンさんはカンボジア政府の日本語ガイドの資格をとり、日本人訪問客相手の観光案内会社を営んでいるビジネスマンです。KEAF はその常連客ということになります。KEAF とソワンさんの付き合いはもう 10 年を超え、KEAF にとってソワンさんはカンボジア事務所長といった関係になっています。ソワンさんファミリーの支援なしには KEAF のスムーズな現地支援活動は大変に難しいと言ってもいいでしょう。

現地の支援学校の要望を聞いて教科書や支援品をそろえて届け、奨学生の面接をし、サッカーや子供の遊びを教える教室を開くといった私たちの支援活動には、ソワンさん、甥のワンターさん、夫人のソペアックさん、その弟のナットさんの誰かが同行してくれます。私たちが暑さにぐったりして車の中で居眠りをしているときも、ちゃんと目的の訪問校に連れて行ってくれます。

限られた訪問日数の中で 14 校の校長先生と事前に連絡を取って日程を調整してくれるのもソワンさんとファミリーです。学校側の事情はどうか。KEAF ができる支援はどこまでか。ソワンさんはそのあたりも大体、頭に入っています。



上の写真の向かって左側がソワンさん、右側が義弟のナットさんです。ソワンさんは少年時代にボル・ポトの恐怖政治を生き抜いて、カンボジアに布教にきた日本人お坊さんから日本語の手ほどきを受けたそうです。他のメンバーはいずれもカンボジアの最高学府、プノンペン大学の日本語学科を卒業しました。ソペアックさんは子

育てしながらの勉強でした。みんな日本訪問の経験もあります。でもソワンさんだけは飛行機に乗るのが怖いそうで、日本に来たことはありません。

皇太子殿下が昨年 6 月カンボジアを訪問したとき、奥さんは空港で皇太子を出迎えるカンボジア政府スタッフの一員に選ばれました。ナットさんは皇太子がプノンペン大学を視察した時、学生の代表として日本語で歓迎のあいさつをしました（会報 64 号・2012 年 6 月参照）。ナットさんは高校生のときはサッカーに夢中だったそうで、「サッカー教室」では小林コーチの助手も務めてくれます。ワンターさんはカンボジア政府や企業などの日本訪問団の同行通訳に請われて日本を訪問することもあります。カンボジア有数の日本語の使い手です。



ソワンさんのファミリーを紹介するとなれば、2 人の子どもさんを抜かすわけにはいきません。上の写真の向かって左が長女の香ちゃん（4 年生）、右が長男の金太郎君（3 年生）です。どちらも本名。ソワンさんの親日家ぶりが徹底していることがこれでよく分かります。下の写真は「サッカー教室」で小林コーチの通訳を務めるソワンさん（2011 年 12 月プロモルプロム小学校で）。



ありがとうございました (2013年2月1日～2013年5月21日)

年会費、寄付金、奨学金をお振込頂いた方々に心よりのお礼を申し上げます (敬称略させていただきます)

(神奈川)	(神奈川)	(大阪)	(埼玉)	(神奈川)
(神奈川)	(埼玉)	(宮崎)	(東京)	(神奈川)
(東京)	(神奈川)	(東京)	(東京)	(東京)
(東京)	(東京)	(東京)	(東京)	(東京)
(東京)	(東京)	(東京)	(東京)	(神奈川)
(静岡)	(東京)	(東京)	(大阪)	(東京)
(東京)	(千葉)	(埼玉)	(静岡)	(東京)
(福岡)	(東京)	(東京)	(東京)	(東京)
(埼玉)	(千葉)	(東京)	(東京)	(埼玉)
(東京)	(大阪)	(滋賀)		(横浜)

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています



写真：アンコールワットの日の出。下の半分は寺院正面の池に映った像。

◇紺野彦司さん

カンボジア教育支援基金 (KEAF) の監事を努めていただいていた紺野彦司さんが3月に亡くなられました。KEAFの活動に力を尽くしていただいたことに厚くお礼を申し上げますとともに、心よりのご冥福を祈ります。

紺野さんは共同通信で出版編集を担当された同僚でした。敬虔なクリスチャンで、浦和 (現さいたま市) のバプティスト教会の社会活動に献身的に関われ、この10年ほどは埼玉にホスピスを創る会の事務局長、会長を務めておられました。そんなご多忙の中、特にお願いして監事を引き受けてもらいました。(金子)

《物品の支援ありがとうございました》

旅行用・手提げ用などカバン多数： (神奈川)、 (東京)、 (東京)。



写真：コンポントゥラバイ高校の校長、副校長先生 (向かって右側) に教科書、文具など支援の品を届けた。2012年6月。

訂正：会報「カンボジア通信」の前号 (66号 2013.3) の8頁「円安困ります」の小見出し「KEAFは輸出型」とあるのは「輸入型」の誤りでした。訂正します。